小学校を視察し、給食を食べる橋下氏

と、いいアイディアを提案されました。ところが、全然原稿が来ない。僕らはチラシの原案をつくったのですが、中止になりました」（同前）

一体、橋下知事は何をしたかったのか。年が明けた二〇一〇年一月、神谷氏は知事室に呼ばれた。そこで橋下氏から重大な決意を聞かされた。

「維新の会をつくる。人を集めよう。次の選挙で（議員を）入れ替えたい」

「誰とやるんですか？」

と、神谷氏が尋ねると、知事は府議の松井一郎氏、吹田市議の井上哲也氏の名前をあげた。神谷氏は困惑した。

「会をつくって大阪を一気に変えるのは賛成です。でも、僕らの独自性や理念とは相容れないものがあります。やるのなら新しい人を集めましょう。理念で集めないと、古い体質の人たちの寄せ集めになります」

今度は知事が困惑した。

世間では橋下氏に既存の古い体質と闘うイメージがあるが、実際は違う。府知事になる時は自民党、民主党が政権をとる頃には小沢氏ら民主党、そして今度は自民党府議だった松井氏らと組んで、その場その場を勝ち抜いていく手法である。

松井氏が「維新を名乗るな」

知事の打診を受けた神谷氏は、翌月、断りを申し入れた。神谷氏が話す。

「〇九年の政権交代直前から、僕は全国をまわって若い市議たちと連携を組んで、地方から政治を変える『龍馬プロジェクト』という取り組みを始めていました。民主党が政権をとっても、いずれダメになり、政界再編となっても、結局、中身が変わらない看板の掛け替えが行われるだけだと思ったのです。それで地方の無所属議員たちと勉強をして、坂本龍馬にならって『船中八策』をつくろうと呼びかけていました。橋下さんにも声をかけました。吹田を変えるには大阪全体でやると展望が見えてきた。だから、知事には発信力があるので、全国で国民運動をやりましょうと提案したのです」

ところが、今となっては信じられないが、橋下氏の返事は彼のイメージとかけ離れたものだった。

「神谷さんは政治を全然わかっていない。一知事が国の形に口を出すのはおこがましい。ましてや小沢さんとの関係もあるし、民主党とうまくやることの方が大事じゃないか。現場もわかっていないのに、夢みたいなことを言うな」

のちに国政選挙に三百人を擁立する！　と吠える人とは別人のようである。

「維新の会」参加を断った神谷氏に、松井一郎氏から電話があった。面識のない松井氏が、いきなり高圧的にこう告げたという。

「大阪維新の会をつくるから、そっちの紛らわしい名前を変えろ。大阪維新の会の教育部という形にしろ」

「ちょっと待って下さい。なんで会ったこともない人に命令されなきゃいけないんですか。教育維新の会をつくったのは僕らですよ。順番が違うでしょ」

すると、松井氏はこう言ったという。

「だったら、代表から橋下を外せ。もう橋下とは連絡を取らせない」

神谷氏が振り返る。

「つい僕もカチンときたのですが、知事の足を引っ張りたくない。知事は府議への配慮もしなければならないし、大変だなと思い、教育維新の名前を変えることにしました。ただ、市長塾のこともあるし、知事に会った時に新しい維新の会は何をするんですか？　と聞いたんです。そこで僕は再びカチンときてしまった」

橋下氏は「ONE大阪をやる。二重行政の解消だ」と言った。のちの「都構想」である。神谷氏が詳細を聞くと、「ディテールとか細かいことは考えていない。今の政治はわかりやすいワンフレーズだ。有権者にわかりやすいワンフレーズで選挙に勝って、力を握ることが大事だよ」と答えたのだ。

神谷氏は、一緒にやっていくのは難しいと感じたという。

「思いや理念が先にあって、伝える時にワンフレーズならわかりますが、手法がおかしいと思いました」

さて、ここからが「橋下劇場」である。昨春、吹田市長選挙に教育維新の会のメンバーが出馬した。市長塾で橋下氏と誓った約束である。だが、そこに大阪維新の会の井上哲也氏も出馬の名乗りをあげたのだ。

「若い人には実績がない」と、選挙戦で神谷氏らは攻撃に晒された。

市長塾のメンバーが苦笑しながらこんな話をする。

「橋下知事が井上氏の応援にきました。その時、神谷君の批判ととれる演説をしたのです。吹田市は税金の無駄遣いをしている。若い市議が全国を回って視察ばかりをしている、と。でも、